

# ウエールズとイングランド

平田 雅博

## はじめに

ウエールズの教育、とくに「労働者諸階級が英語の知識を獲得するために与えられている手段」を調査した政府報告書が「ウエールズにおける教育状態の調査委員会報告書」<sup>(1)</sup>と題されて一八四七年に出版された。

第一部は、南ウエールズ（モンマス、グラモーガン、カーマーゼン、ペンブロークの各州）、第二部は、中央ウエールズ（ラドノー、ブレックノック、カーディガンの各州）、第三部は、北ウエールズ（フリント、デンプビー、モントゴメリー、メリオス、カナーヴォン、アングルシーの各州）をそれぞれ対象とした。このように三分割されたウエールズを、枢密院教育委員会書記ケイ・シヤトルワースに任命された三人の調査委員（リンゲン、サイモンズ、ジョンソン）はそれぞれの地域を担当して、ウエールズ語の分かる通訳兼調査助手を従えて、野山を馬で精力的に駆けめぐって、学校を訪問しては報告書を書き、データを集積して、それを分析し、総括して、一八四七年四月一日に出版されたのが上記の報告書であった。内容は、文字通りウエールズの教育状態を徹底的に調べ上げたもので、ウエールズの不十分な教育事情と英語の知識水準の低さを反論の余地のない、客観的な事実として示そうとしたものだった。

筆者は、ウエールズに関するいくつかの拙稿<sup>(2)</sup>を書いているが、本稿ではとくに、ウエールズとイングランドとの対照性に着目して上記の報告書を読み解き、イングランド側から見たウエールズの地域としての特殊性を浮かび上がらせ

PICTURES FOR THE MILLION OF WALES.--No. 2.

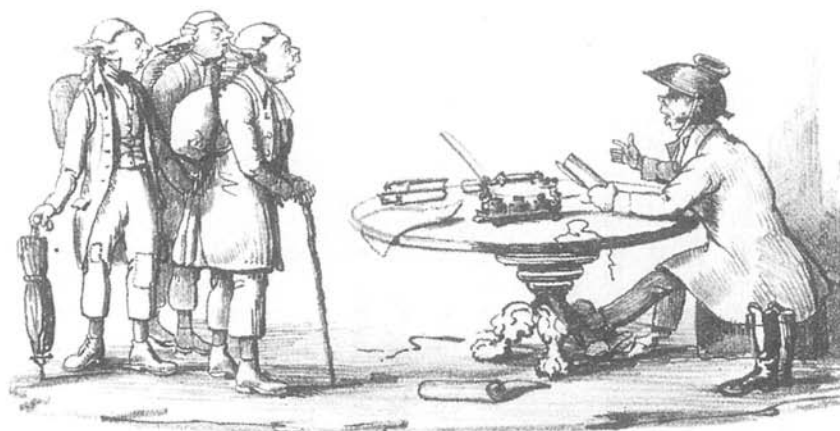


図 三人の調査委員に指示を出すケイ＝シャトルワース。

出典 W.Vaughan-Thomas, *Wales; A History*, 1985, Michael Joseph, London

る。ウエールズとウエールズ人はたえずイングランドとの対照性の視点から論じられ、動物にたとえられたり、植民地や帝国との類似性が指摘されていた。

## 1 言語と宗教

### (1) 文明と野蛮

調査委員のリンゲン、サイモンズ、ジョンソンの三人はそれぞれリンゲンが南部ウエールズ、サイモンズが中部ウエールズ、ジョンソンが北部ウエールズと地域を分担して調査に当たったが、担当する地域がどうあれ、三人にはポジティブなキーワードとネガティブなキーワードとの二つからなる二項対立的な図式を共通して持っていた。

「光明」「文明」「高位」といったポジティブなキーワードは、この調査委員たちがわれらこそその代表と考えた、イングランドと中流階級の価値観とが結びついた性質を表す言葉であった。反対に、「暗黒」「野蛮」「低位」といったネガティブなキーワードは、ウエールズの文化と社会の特質、およびウエールズの労働者階級の属性を持つ

人々の性質を表す言葉であつた。こういったキーワードで伝えようとしたメッセージは明白で、イギリス政府はポジティブでイングリランド的な性質を奨励し、ネガティブでウェールズ的な性質は消滅させる、との意図を表明していた。当報告書はこの過程の第一歩となるものであつた。<sup>(3)</sup>

まず、サイモンズのキーワードは「光明」と「暗黒」である。彼は以下のように報告した。ウェールズでは「迷信が流布している。魔よけ、超自然現象、魔術への信仰は、文明と光明のさなかでも生き延びている。文明により、こういった暗黒時代の残滓はとうの昔に消滅させられたはずなのに。光明は、彼らの言語に隠匿され、啓蒙の尽力にもかき乱されないまま、人々の心を覆い隠している濃い暗黒の中にまだ浸透していない」。<sup>(4)</sup>

次のジョンソンは「文明」と「野蛮」を対比させた。野蛮とは、たとえば「床に入つて求婚すること、ウェールズに広く流布している慣習」「結婚式に先立つ野蛮な慣習」と解説してみせた「バンダリング」である。便所のないウェールズの非衛生な学校も「野蛮で非道德的な慣習」「ウェールズの文明を損なっている」。彼の言う「野蛮」とは、模範としたヴィクトリア朝中流階級の行動規範に照らして、これには拘束されないウェールズ人の身体性に関していた。たしかに、平日学校とは異なり活況を呈していた日曜学校は北ウェールズの「文明」の手段である。しかし、この学校もウェールズ語で教育される限り、便所のない学校やバンダリングをなくすのに成功していない。これもあれも、すべては、英語問題に帰着する。多くのウェールズの労働者階級が英語を効果的に話せたり理解していないこと、この不十分さは「文明の不完全な結果」である。<sup>(5)</sup>

三人目のリンゲンのキーワードは、上の二人より単純にして率直な「高位」と「低位」である。社会経済的な言及があるのもリンゲンの特徴である。この高低のヒエラルキーは言語に注目すると明白となる。リンゲンが言うには「特異な言語、ウェールズ語という現象があるために、私の「担当」地区では、大衆が社会の最上部分から切り離されている」。ウェールズ人は、社会の頂点には見あたらなない。彼の使う言語が必要な情報を得ることも伝えることも出来ない言語であるために、彼はおちおちたままになっている。それは旧式の農業、神学、簡素な農村生活の言語であり、それ以外の彼

のまわりのすべての世界は英語である。

言語ゆえに、彼は「高位」の者から無視され、「低位」の世界で暮らさざるをえず、「社会は完全に彼の頭上越して進展している」。ウエールズの復興運動、レベカ、チャーティストの勃発といった「奇妙で異常な事件」がおこって、これまでの「われわれの経験とはまったく相容れない」社会の言葉が注目を浴びるときを除けば、他のことはいつさい、彼の耳に入らない、とも記されている。これらはすべて「社会」から完全に排除された結果、彼はその外部、ないし底辺に置かれていること、さらには、浸透不可能な壁で隔てられており、彼が入り込む余地はないこと、要するに「高位」と「低位」の隔絶性を示している。<sup>(7)</sup>

## (2) 言語と道徳水準

ウエールズの社会、文化のすべての局面が言語に結びつき、この言語問題がもつとも重要性をおびていた。そもそも、このウエールズの教育事情調査を最初に指示した命令書にウエールズの「英語の知識を労働者階級が獲得するのに与えられた手段」について調査し、「子供たちはウエールズ語でそれとも英語で教育を受けているのか、いずれの場合でも文法は教育されているかどうか」を調べよ、と記されていた。<sup>(8)</sup>

調査対象となったウエールズの労働者階級の大半（全体の四分の三ほど）が、ウエールズ語を話していたので、調査委員とその助手たちがウエールズ性[Welsh]をウエールズ語を話す人[Welsh speaking]と同義としていたのは当然であった。

サイモンズは、「ウエールズ人地域[Welsh districts]とはウエールズ語が普通の人々の炉辺の言語になっているところ」<sup>(9)</sup>と書いたし、助手たちも「教員はウエールズ人なのにウエールズ語で質問しない」とか「例外を除き、彼らはみなウエールズ人で、英語はまったくわからず」「パンとチーズ」は彼らの言葉「ウエールズ語」で何というのかと聞いてみてもラチがあかなかつた」と記した。<sup>(10)</sup>

ウエルズ人としての民族性とウエルズ語という言語との同一視、あるいは両者は分かちがたく関連しているとの認識により、ウエルズ人の性質とウエルズ語とは強い連関性を持つと仮定された。言語と性質を結びつけてしまう事態は、ウエルズ人のネガティブな性質を調査委員や助手たちが非難する場合に、見られることになる。「清潔性の無視はイングランド化された地域よりも純粹ウエルズ語地域に顕著である」とか、衛生の欠如は「ウエルズ的な性質の顕著な事実である」とか「ウエルズの子供はこの王国のどこよりも『道德の訓練を』必要とし、それを欠如している」<sup>(11)</sup>と、調査委員の報告には、道德、衛生、清潔感の欠如が指摘され、これらの非難されるべき行動は、この言語を話すものの性格の一部とはつきりと見なされている。

彼らには、言語とそれを話す共同体住民の性格や行動様式とを結びつける思考がある。言語とそれを話す共同体が達した段階の「進歩」との関係、およびここから導かれる優れた英語と劣ったウエルズ語との相対的な言語の位置をめぐると同時代の見解に照らすと、彼らのこういった思考は当然と言うべきであった。

調査委員たちは、ウエルズ語と英語の両言語の領分を認識していた。ジョンソンは、ウエルズ語は家庭と宗教（関心がある者には詩）の言語であり、英語は商業、法律、公務といった職に就こうとする者の言語である。労働者の仕事は働くことで、詩や宗教は不適切な学習科目である。ウエルズ語は実践的な知識や技能を伝えるには役に立たない。<sup>(15)</sup>ウエルズ語は宗教を除けば「時代遅れで乏しい」、「知識の」限られた供給源しか持たない。<sup>(16)</sup>

ジョンソンによると、「読み書き能力があるという石切工」もいると言うが、連中はウエルズ語で書かれたもの以外には知識を得る手段は何もない。読める者もいるにはいるし、その中の最上の者は英語の新聞も読めるが、連中も知識を得るために読んでいるのではない、と述べている。

読み書き能力はあってもしよせんウエルズ語からの知識ではたかが知れているとの指摘は、「優良なヨーロッパの図書館のたった一冊はインドとアラブの現地人が書いた全文献に匹敵する」と述べたマコーリーの傲慢な言葉に似てはいないか。

こういったウエールズの「文明の不完全な結果」は「この住民の知的状態」ばかりか、「北ウエールズのすべてのカウンティのあらゆる貧民階級の社会的道德的状态」にも見られると、ジョンソンは続けて述べている。<sup>(17)</sup>言語と共同体の知的レベルを結合させたり、言語と社会的道德的状态の関連にも言及するあたりも、同様な理由でインドの言葉を斥けたマコーリーに似ている。<sup>(18)</sup>

ジョンソンのコメントから浮かぶ全体的な印象は、ウエールズ語は救いたい言語であることである。その理由は、ウエールズ語を第一言語、主たる言語とする子供は貧困な教育しか受けられず、「文明の手段」を利用できなくなるのは真実であるばかりか、この言語が供給する資源があまりにも「乏しい」ために、どうあがいても文明の手段を利用できないからである。

ここから、もつとも重要な課題は効果的な英語教育である、と導かれる。教員の任命や教科書の採択の基準は英語を学校でうまく教えることができること<sup>(19)</sup>、および、子供は幼児学校で英語を学び始めるべきであると主張される。<sup>(20)</sup>

すでに見たように、言語に関する同時代の見解は、言語の知的レベルとそれを話す共同体の知的レベルは密接に関連しているということであり、共同体の知的レベルが低く、否定的な道德傾向も見られれば、それらと言語は緊密に関連していると認識された。ジョンソンはこの思考を担う典型的な人物の一人であった。

### (3) 鉄道の時代と英語の広がり

リンゲンも「利益が英語を要求するなら、愛着はウエールズ語の方を好む。英語は、利益のために作るべき新たな友人と見なされている。ウエールズ語は大事にされるべきで、とくに落ちぶれても見放されるべきではない古い友人と見なされている」と、家族、共同体、宗教のための言語としてのウエールズ語、世俗の利益のための言語としての英語とする両言語の領分を認めている。ウエールズ語保持の意見にも一部耳を傾けている他、生まれながらの能弁、雄弁なウエールズ人が、今日、世間の必要に迫られて英語を話そうとするものの、不完全にしか話せない英語による自己表現能力の

なさを知らされてしまうのは「一種の恥辱の烙印」であろう、とまで同情している。

しかし、ウェールズでは「英語の無知とは切り離せない、何重もの悪弊」(25)について、四方八方で耳にした意見があった。この悪弊はあまりに分かり切ったことで、広く認められているので、特定する必要もない」として、以下のような意見を述べている。ウェールズには

このような地盤に立つウェールズ語とウェールズ語の影のもとに住民を取り囲む特殊な道德上の雰囲気がある。この両者には強い相関関係があり、この言語はこの道德と合致する考えしか伝達できず、この道德とは合致しない考えを伝える試みはすべて失敗に終わる。……共通言語「英語」以外の手段を使っても思考は共通のものとはならない。一つの言語からもう一つの言語に移っていく公式の水門を開くのは不可能である。この流布には、数え切れないほど無数の細かな気孔が空いたネットワークが必要である。このネットワークなくしては、異境の空間(そこでは思考は死んでいる)に思考がいきわたることはない。真鍮の壁のように、間接教育「学校以外の教育」が、人々の言語「ウェールズ語」によって排除されているところでは、直接教育「学校教育」は居場所をなくしている。(21)

やや難解な比喩を含む文章ながら、ここでは、まず、他の調査委員と共通して、言語と道德は関連するものとして論じられている。「公式の水門」という表現は、水門の両側にある二つの言語、英語とウェールズ語が、いかに異なる「水位」にあるかを強調するものであり、水位を同等にして「水門」を開くのは不可能なこと、「真鍮の壁」の金属的で堅い比喩も、ウェールズ語と英語を分かť分断の厳しさ、厳格さ、不浸透性を強調している。また、英語の流布を容易にするためには「公式」の学校教育の領域に限定せずに、「間接教育」、すなわち人々が教室外で獲得する知識、情報を通じてなされるべきである。こういった知識、情報を流布させる「気孔のネットワーク」の比喩は、この広がりや、自然で本質的なもの、当然あるべきものを表している。

「気孔のネットワーク」は新しい時代の到来を告げるものでもあった。リンゲンは、鉄道や主要道路を通じて、鉄鉱や石炭の鉱山への英語を話す労働者の流入により、要するに今日の活動と接するあらゆる場所から、英語が急速に広がっている、と告げ、鉄道と大鉱床の全面的な開発は、こういった接触点を倍増化させる前夜となっていると見て、「ここに人々の教育の大義を活発に突き動かす原動力がある」と宣言している。

要するに、リンゲンの主張は、学校では、この地域では母語になりつつある英語で、鉄道が提供する地位と同様のレベルに人々を押し上げる教育を施すべきであり、学校以外でも、英語を習い、ウェールズ語を忘れないさい、これがウェールズ人労働者の取るべき正しい自然の道である、というものであった。これは、一八四〇年代の鉄道の時代を背景にして、ウェールズへの英語の流布の正当性を主張したものである。

#### (4) 真実をゆがめるウェールズ語

サイモンズも他の二人と同様、英語を学びたいとのウェールズの貧民の要求を認識していたが、他の二人と違うのは、その要求が「もっぱら金銭的な動機」だとしている点である。<sup>(23)</sup> また、英語の急速な普及にはリンゲンほど樂觀的ではなかった。リンゲンの担当した英語が普及しつつあった南部地域と異なり、サイモンズの担当地域は中部ウェールズの田園で、まだ一部の住民しか英語を話さず、すべての住民が英語を話すには相当な期間がかかると見ていた。

彼はひんばんに引用されることになる以下の文章を総括報告に記した。彼は「ウェールズ語はウェールズにとり大きなマイナスであり、ウェールズ人の道徳上の進歩や商売上の繁栄にとって何重もの障害となる」と述べて、ウェールズ語は、ウェールズ人が彼らの文明を大いに進展させるはずのイングランドとの交流をする妨げとなり、彼らの精神的な知識を改善する道の邪魔となる、この証拠としてウェールズには文学に値するものが見られない、ウェールズ語で読めるものは唯一月刊誌があるだけである、と続けている。

さらに、ウェールズ語の害悪が恐ろしいほどはつきりとしたものとなるのは、裁判所においてである、として裁判の



場におけるウェールズ語に視点を移している。ウェールズ語は、「真実をゆがめ、詐欺を勧め、法廷で頻繁に見られる偽証をそのかし、解釈の抜け道を通じて探索を免れさせる」。こういった欺瞞が成功して公のものになると、公衆の道徳や真実の尊重に対して深刻な影響を与えることになる。「ウェールズ人の犯罪者とウェールズ人の陪審がいて、弁護士と判事が英語で話すというイングランドの裁判のまねごとは、あまりにお粗末でひどいために論評の必要もない。しかし、これはウェールズ人に英語が教えられるまでにはなくならないに違いないインチキ裁判である」という。<sup>(24)</sup>

この文章はひんぱんに引用され、かつここでもなされた批判はあまりに辛辣なので、この判断のもととなった論拠は知るに値しよう。この判断はここでいう「インチキ裁判」の事例を唯一の論拠としたもので、他の論拠はない。

そこで、このインチキ裁判とは何だったか。これは、あるレイブ事件の被告が最初有罪だったが後で破棄された裁判だった。サイモンズが読んだ裁判報告<sup>(25)</sup>を書いていた当裁判の法廷弁護士 E・C・L・ホールは、これ以前のレベカ暴動での報告書にも登場して、ウェールズ語の駆逐に賛成発言をしている人物であった。この事例では、ウェールズ人の陪審が討議の後、陪審長が「有罪」を宣告し、それに基づいた判決も下された。しかし、その直後に陪審の数名が被告の友人に脅迫された。すると彼らは「あれは陪審長の宣告であり、自分たちは英語がわからなかったために知らなかった」と言い逃れた。これを受けて、裁判はやり直され、前の判決が破棄されるに至った、という内容である。

この報告の詳細さや長さから見ると、弁護士として勝てると思っていた裁判に負けたことへのホールの恨みがまじさを感じできる。陪審員への脅迫に対する断固たる対処こそ、こういった不正への解決策となるはずであるが、ホールはそうとは考えなかった。代わりに、ホールの矛先は、英語が分からなかったとしらを切る陪審員、自分が望む判決を下さなかった陪審員の話す言語ウェールズ語<sup>(26)</sup>へ向かい、「二言語は偽証をたやすく導く」、したがって、欠陥のあるウェールズ語を法廷から消滅させよ、と決めた。

ともあれ、一五三六年に発布された連合法にあった「裁判にあつては英語を使うべし」との言語条項以来、司法は教育とともにウェールズ語の使用が抑制された場であった。サイモンズはこの後に続けて、裁判のまねごとは英語教育がな

されるまで続き、英語教育のための効果的な学校ができてはじめてなくなる、と学校に期待をかけている。さらに「よい学校」は、ウェールズにおけるあらゆる道徳上の改善や人々の進展にたいする重大な障害を取り除いてくれる。一〇分の一も英語が話されていない地域を見ると「これから百年ないし二百年かけても英語がウェールズの全土に行き渡るとは信じられない。ただし、この進歩を妨げないよりよき手段が講じられるならば話は別である」として、この手段こそ「この目的を遂行する完璧によい学校である。学校は「ウェールズの」人々の望みである。健全な世俗教育と宗教教育が肉体的状態を向上させ、道徳的な墮落を取り除くことには何ら疑念がない」として、「ウェールズ人がよい教育を受け、彼ら以外の人々が享受してきたのと同じ注目と配慮を受けるならば、文明国の間でも高いランクに仲間入りする可能性がある」と結んでいるのである。<sup>(27)</sup>

ここで再度認識すべきは、英語による学校教育を進展させれば、ウェールズも高い文明国になるという未来図よりも、英語教育をする「よい学校」をつくれれば、ウェールズ語を原因とする「道徳的な墮落」を除去できるとの確信と、言語とそれを話す人々の道徳の結合のさせ方である。

### (5) 宗教問題

宗教はウェールズの日曜学校的主要科目であり、容易に手に入れやすく安価だった聖書を使用して平日学校でも読み方を教えていた。学校視察では、他の科目より宗教に関する質問が多く、報告書にも、キリスト教の教義、聖書、聖書物語に関する質疑を詳細に記録している。

調査委員や助手にとって、イギリス社会のメンバーであれば、キリスト教の基本的な知識がいかに浅薄なものであれ、それは持つべきものであり、完全に持たざる者は救済の手段ばかりか文明の手段にも欠如する者であった。彼らにとって、次のような事例は驚きだった。

今日この教区への道すがら、七歳の少年と会い、ウェールズ語で語るには、彼は平日学校にも日曜学校に行ったことはないし、最初の人間が誰か知らないし、イエス・キリストというのもしも聞いたことがない、という。それどころか神についても、その霊についても何も知らないと言えた。よこしまな人は死後どこに行くのだろうか、と尋ねたところ、ウェールズ語で「われら貧しき者たち」というばかりだった。<sup>(28)</sup>

このようなイエス・キリストも知らない、キリスト教の枠外にある子供は、彼らにとって、精神的にも道徳的にも危険な地域にいるばかりか、社会への潜在的な脅威にもなると思われた。なぜならば、彼らには通常の道徳観を養う機会が欠如しており、放っておけば、レベカ暴動やチャーティスト運動のような政治的社会的扇情者の餌食になってしまう可能性があるからである。この七歳の少年も無知が矯正されない限り、彼が住む共同体の安定性への潜在的な脅威であった。子供のキリスト教の知識は社会的規律化の要石でもあった。

それゆえに、学校では決まって子供のキリスト教の知識を試したばかりか、学校のない地域でも、たまたま会った子供に近づいて、基本的な知識を質問した。子供たちの無知はあまりにもひどいもので「異教徒としか思えない無知」「神を冒瀆するほどでここでは実態を記述できない」とひんばんに報告された。

一九世紀半ばのウェールズにおける大きな宗教的分離は国教会と非国教会であった。前者は権力と地位を持ち、後者は数を持っていた。一八五一年のセンサスでは八〇%が自分たちを非国教徒の一員かその支持者と思っていた。<sup>(29)</sup>

調査委員は、イングランド人の国教徒として、国教会と国家との間の法的政治的紐帯を正当で必要なものと見なした。彼らが問題としたのは、ウェールズにおける宗教の無視や宗教的知識の欠如とともに、ウェールズ人が信じる宗教が間違った種類の宗教だったことであつた。調査委員のインフォーマントの多くにとって、ウェールズの国教会は真理と礼節の見張りの塔であり、非国教徒は教義が不健全であるばかりか政治的にも不信を抱かざるを得ない存在であつた。

調査委員はほとんど因果関係がない二つの要因、非国教徒と貧民の慣習や行動をたびたび並置した。次の例は典型的

な記述である。

ウェールズのメソジストはこの近隣から出てきた。しかし、メソジストは近年ではあまりに蔓延して猖獗をきわめているために、ここならではメソジストの教えの特徴といったものもはや見いだせない。貧民の極端な不潔の慣習は、どこにも見られるものながら、(他のどこよりもひどいとまでは言わないが)ここもひどい。少しは見た目の清潔さや見栄えのよさも期待される町なのに目に余る。糞尿が山となって通りや小路にあふれている。寝たり起きたりする部屋が二つ以上ある家はない。筆舌に尽くしがたい不潔と無秩序状態になっている。豚と家禽類がいつも同居して家族の一員となっている<sup>(30)</sup>。

これはウェールズの非国教徒の一宗派メソジストが出現する地域の説明である。糞尿が山のままになっている共同体の貧困、部屋が二つ以上ない家の貧困という事実はもちろん無視され、その原因を見ようとする意図もない。メソジストは調査委員が非難する不潔さと根拠なしに無理矢理結びつけられている。全体的なメッセージは、豚や家禽類と家族同様に同居するメソジストは亜人間である、というものである。

調査委員たちは、平日学校は国家の関心事だったから、平日学校の宗教教育には厳しい態度を示したが、日曜学校は国家の関心事ではなかったという事情もあり、日曜学校の一般的傾向は決定的に役に立っているとか、ウェールズの田舎では非国教徒の日曜学校も「文明の主要な道具」と評価したこともあった。ただし、日曜学校の教員も暗記教育のために質はそれほどよくなく、ここの宗教教育も暗記一辺倒と批判した点は平日学校と同様だった。

調査委員が困惑したのは「宗教における伝道精神の熱心な作用」と対比的な「世俗教育の無視」であった。本や雑誌はほとんど宗教関係ではないか。聖書を隅々まで知っている人々もいるが、他に何を知っているだろうか。「日曜学校の生徒は全般にウェールズの地理よりもパレスチナの地理の方が詳しい<sup>(31)</sup>」のではないか、いまの地理よりもいにしえの地理

に詳しい世間知らず、というのが彼らの感想であつた。

非国教徒ウェールズ人の宗教好き、宗教本の多さへの批判を通じて、調査委員の理想とするウェールズ人宗教教育のモデルが見えてくる。それは、イングランド国教会が理解する、キリスト教の基本的な信念を教えるべきで、詳細にわたる聖書の探究ではないし、その内容に立ち入って深く解釈を試みたりすることでもない、聖書のもっとも有名な話と、ウェールズ人よりもよく知る解釈者に従つて教理問答を理解することである。宗教教育の目的は国教会に所属して国教会の学校に通つて、イギリス社会の権威への服従を学ぶことであつた。

## 2 さらになるネガティブイメージ

### (1) 性的言説

先に触れたように、ジョンソンは、日曜学校が北ウェールズの文明の手段となつてゐることは認めながらも、「ウェールズの文明を損なつてゐる」非衛生的な慣習を終わらせるにも、「この土地固有の文明という不完全な性質をいやが上でも物語る」男女混合の寝所を終わらせるのにも、「いかなる文明の手段にも阻止されてゐない」バンダリングを終わらせるのにも成功してゐない、と報告した。<sup>(32)</sup>

ここでは非衛生、男女混合、バンダリングが文明によつて克服すべきセツトとなつて登場してゐる。この三つを結ぶものはウェールズ人女性である。ウェールズの家庭は不潔で非衛生的であるかぎり、家庭の道徳性を保てない。家族の一員たる女性は、床を洗い流し、清潔さを確保して、道徳的な気品を整えてはじめて、彼女の責任を全うする。少なくとも、調査委員たちの眼にはこのように映つた。したがつて、ウェールズ人の性的道徳性についての報告書のコメントは、圧倒的にウェールズ人女性の性的道徳性に集中した。そして、あとあと、この問題をめぐつては、ウェールズでは広範にわたつて、最大と言つてもよいほどの敵対的な反応を引き起こすことになつた。

報告書でもっとも痛烈なコメントの多くは、おもに「バンダリング」と呼ばれる慣習に対するものだった。今日の辞書を引くと「着衣同衾。婚約中の男女が着衣のまま同じ床に寝るウェールズやニューイングランドの昔の習慣」<sup>(33)</sup>とある。ところが、ウェールズ専門の事典では「一八〇―一九世紀のイングランド人旅行者の関心を引きつけたウェールズの「ベッド上の求愛」。求愛期間中に処女の使用人がたびたび夜に寝室に呼ばれた。靴を脱いで、カップルは（ベッドの中ではなく）ベッドの上でおしゃべりする。おしゃべりしている間は階下の人には不適切な行為はないと見なされた。性的な「不道德性」をもつのでは、との疑いは、一八四七年以後の政府報告書（青書）から生まれた」<sup>(34)</sup>とある。ここでは興味深いことに、この言葉は、本来は穏当なカップルのおしゃべりだったものが、イングランド人旅行者の観点から性的な問題特有の尾ひれがついて、性的な不道德性をもつものとなった歴史的経過が記されている。要するに、ウェールズの風変わりな慣習のピクチャレスクな名残りが、イングランド人旅行者の邪推を経て、不道德性が与えられるようになった。われわれが本稿で検討している政府報告書はこの転換に貢献した。

サイモンズは、自発的に証言してくれた人が教えてくれた低道德の一つである、女性の貞節のなさを説明する中で、バンダリングを「床に入って求婚すること、ウェールズに広く流布している慣習」と説明している。女性の貞節の欠如は、「バンダリング」および「夜の祈祷会」（これは男女が連れだつて暗闇を家路に帰る機会を与えると考えられた）<sup>(35)</sup>、さらには、既婚者も未婚者も、両性一緒くたにして、部屋の間切りもなければカーテンもなく、寝床をくつつけて、同じ寝室に寝させる慣習、からも由来している、これは貧民ばかりか上層部にも広がっているおぞましい慣習であると、述べている。バンダリングという「結婚式の前の野蛮な慣習」は「獣のように下品」であり、「貞淑の欠如」は既婚者も未婚者も農場の同じ寝所に「放り込むというへどが出るような慣習」のためだ、とも書いた<sup>(37)</sup>。

リンデンも各地からの報告文に「全般にふしだらというウェールズ人農民の娘のうわさには驚かない、ふしだらでない娘たちの方に驚く」<sup>(38)</sup>とコメントする中で、男女の使用人の寝室を分けない農民を非難した。

「非衛生」「男女混合」「バンダリング」をセットにして論じたジョンソンは、「ウェールズに特殊な悪徳」である男女混

合の寝所は、長いこと行われてきたために「その存在はほとんど悪徳とは見なされていない。そのウェールズの慣習があるために、結婚式の前行われる野蠻な風習が正当化されると言われている」と述べた。<sup>(39)</sup>「ウェールズに特殊な悪徳」「ウェールズのこの慣習」による、バンダリングという「野蠻な風習」の正当化、との筆の運びは、「ウェールズの慣習」自体によつて「野蠻」が生まれる、という論理にならざるを得ない。こうなればウェールズ文化のあらゆる局面がひとしく「野蠻」となると言うに近く、ウェールズの文化全般への厳しい攻撃となつてくる。

## (2) 情報提供者への依存

ジョンソンにこう書かせたウェールズの情報提供者はいずれも国教会牧師で、ウェールズ人女性の貞操の欠如を嘆き、娘が寢床に誘われる慣習、その結果としての庶子の多さ、その原因としての教育の欠如を指摘している。これらは非国教徒の成功に煮え湯を飲まされていた国教会牧師の情報で、彼らにはロンドンからの調査委員の到来を利用して、権力を借りて、逆襲する意図があつたとの非難がまもなくなされるが、ジョンソンは、このようなインフォーマントの多くの見解を、ほぼ鵜呑みにして、ウェールズ人の「野蠻」な性質を例証する事実であるかのように提示した。

しかもジョンソンは、これらの貞操の欠如、性的悪徳とそれに伴う庶子誕生率の高さを教育の欠如と結びつけて、以下のように述べた。「これらは全面的に教育の欠如によるものであり、よりよき教育、より全般的な文明の力を借りて、恥と慎ましさで今の慣習を考えてみる教育がなされるまで、いかなる法による抑制も罰もこの悪徳を食い止めることはできない。この恐るべき悪徳に対処するには、ウェールズの現在の教育制度ではまったく無力である」。<sup>(41)</sup>

こういった異文化の地を訪れて短期間の調査をする場合、とくに性的な慣習といった微妙な話題に関しては、「外国人旅行者」には、他の社会的行動よりも見えにくいために、調査委員は同じ言語を操り、現地の情報通である「インフォーマント」に依存せざるをえなかった。独自の調査をしようにも、言語の壁があつた。<sup>(42)</sup>リンゲンは「私の言うことがだれ一人として一言も理解できない」一六、七人のウェールズ人に取り囲まれた、まったく英語が通じない地域Ⅱ異文化の地域

に調査に出かけたために、地元の情報を得るには英語が分かる「イングリッド化された」治安判事や国教会牧師などのインフォーマントに頼らざるを得なかった。

サイモンズも教区に着いたら最初に会って、情報を得る人物として、地元の国教会聖職者をインフォーマントとして指定していた。<sup>(43)</sup>このために訪問先の場所や制度の「性格」の叙述はこれらのバイアスのかかった情報提供者の見解に依存することになった。<sup>(44)</sup>

インフォーマントの情報は、調査対象の地域の住民の一部の意見にすぎないにもかかわらず、これこそ当該地域の意見の代表的な意見であるかのような見解が形成されてしまう。これがとくに当てはまるのが、おおっぱらには論じることができず、隠微な形をとるが流布しやすいヴィクトリア朝の性的言説である。

このような性的言説をめぐっては、それにコメントする側の階級的な視点のありかも考慮すべきである。イングリッド人で、大学教育を受けて将来を嘱望される法曹界の若い男性から見れば、自然に近く、それゆえに文明からは遠い存在であり、性的行動を人生のあらゆる局面に持ち込み、人生の目標すら変えてしまう、ウェールズの男女の労働者階級の人々は、階級的な他者である。彼らが耳にした情報への対応は、労働者階級の身体性に対する、こういったはつきりと標準的な中流階級の見解から来ている。それゆえに、性的な問題に対する調査委員の関心は、中流階級の男性から見たもっぱら道徳的な意味にとどまったが、性的行動により人生の目標を変えてもよいウェールズの労働者階級にとつては、道徳の維持よりも現実の問題が切実だった可能性も考える必要がある。これに照らせば、性的行動の道徳問題に集中した、調査委員たちの見解の特殊性の方が浮かび上がる。<sup>(45)</sup>

### (3) 動物にたとえられるウェールズ人

言語と深い関連性をもつウェールズ人の性質には、あとあとも注目されることになる性の次元の問題の他に、犯罪の問題もあった。犯罪も低い道徳性がらみで報告書に登場する。そこではウェールズ人の低い道徳性が指摘されていた。



ウェールズでは殺人、強盗、個人的暴力、強姦、偽造などの大きな事件が起こっていないのはヨーロッパでも随一だが、小さな盗み、嘘つき、詐欺、あらゆる種のベテン、泥酔、怠慢といった、ささいな犯罪が多く、道徳性がこれほど低い国も少ない。これを罪とも思ってもいないもつとも教育のない人々にあふれている、とやはり、小さな犯罪の多さ、道徳性の欠如、無教育と連続させて論じられている。

このように論じたサイモンズは、一方では、ウェールズに「罰に値する罪」がない大きな原因は「悪意の行動、他人への周到な中傷をすべて思いとどまらせる自然の慈しみ、心の温かさ」であるからであり、ウェールズ人は、共同体の構成員同士による儀式費用を相互援助するという「古くからの慣習」を証拠とする「推奨されるべき特質」を持つ、と書いた。こういったウェールズ人の性質を説明する「自然」という言葉に、ロバーツは植民地の「高貴なる野蛮人」の言説との共通性を見ている。ウェールズ人の性質を叙述する言説は植民地や帝国の言説と類似してくる。<sup>(47)</sup>

「自然」という言葉には文明との接触がないナイーブという意味もあり、ウェールズ人はこの性質も併せ持つために、煽動されやすい、だまされやすい、とも見なされた。それどころか、サイモンズがモンマスシャーのウェールズ人について述べた、賃金を子供の教育費とか自分を「向上」させる手だてに使わずに、もっぱら「肉欲と獣の快楽」に使う人々と、もつと露骨な表現にもなることがあった。これは、ケイ・シヤトルワースが帝国各地の「有色人種」について述べた<sup>(48)</sup>「興奮するとたやすく我を忘れ、文明社会の農民にはふさわしくないと見られる娯楽を必要とする人種」「野蛮から出現したばかりの人種」という言い方とも似ている。

レベカ暴動とチャーターティスト運動に馳せ参じたウェールズ人は、十字軍に馳せ参じた「蜂の大群 swarm」のようだと表現された。「蜂の大群」のようにウェールズ人を動物にたとえること、ないし、動物との類似性の指摘は、当時も人間の「卑しさ」に言及する際に頻繁に見られたが、報告書に盛られた数の多さと多様性は注目に値する。<sup>(49)</sup>これは先にも触れたように、バンダリングは「獣のように下品」という言い方で、性的な行動にあてはめられたことは言うまでもない。以下の引用文は動物との近さを報告している。

豚と家禽類がいつもいる家族の一員となっている。町に通じる入り口の一つになっている小径を降りていくと、大きな雌豚がドア（の下半分は閉まっていた）に近寄り、ドアの上の部分に前足をかけて、揺すっているのが見えた。腕に子供を抱えた女性が道の向こう側から駆け足で横切り、急いでドアを開けた。雌豚はその遅れに腹を立てているかのようにブーブー鳴きながら家に入ってしまった。女性がこれに続き、ドアを閉めた。<sup>(50)</sup>

ウエルズでは家族の一員である豚が、ドアを開けるのに遅れた女性に腹を立てたかのように家に入ったと擬人化されている。この逸話風の叙述の効果は、慣習と生活状況において、人々と動物との近接性、言い換えれば、人が動物並みの生活環境しか持っていないことを示す。<sup>(51)</sup>

生活様式全般についても、ジョンソンは牧師の見解（カナヴァンの人は「生活慣習が獣のようだ」）を引用して、彼らは「獣のように無知である」と記述した。ウエルズ人が住み仕事をした家や部屋についても、ウエルズの小屋は「馬屋にも不適切」だとか、この家ときたら「豚舎よりもひどい悪臭」がするとか、連中の学校は「『野獣の』巢窟」「畜牛をかくまうものにも不適切」「犬小屋よりも悪臭がする」と報告した。個々のウエルズ人は知的だが、大半は「羊のように愚かでほんやりしている」。使う言葉と言えば「獣が叫び声を上げる」だけですぐ用が済むようなことしかいわない、と記した。<sup>(52)</sup>

#### （4）ウエルズのホッテントット

動物のたとえとともに、ウエルズ人は他の軽蔑される集団とともに「人間」のカテゴリーの最底辺に置かれた。たとえば、調査助手の一人は、ブレコンシャーの田舎において学校など行ったこともない少年について「あいつと粗野で無教育なホッテントットとはまったく変わらない」と書いた。<sup>(53)</sup>

報告書にはホッテントットやニグロばかりか、これも最底辺に位置する「泥棒と売春婦の隠れ家」がある「中国と呼

ばれる地区」が出てくる。この地区は「一種のウェールズのアルサティア Alsatia（アルサティアとは、負債者や犯罪者が逃げ込むアジールであったロンドンのホワイトフライアーズを指すスラングである）」<sup>(56)</sup>とも言うべき「泥酔通り」である。リンゲンはここを探訪し、冬だったので事件にも酔漢にも遭遇しなかったが、夏には若い男女が飲み歩き、夜通しで底抜け騒ぎを繰り返す、と書いた。<sup>(56)</sup>

報告書には、同じようにロンドンの貧民街と比較して「人が住めない家が立ち並ぶロンドンのセントジャイルズ、カウクロス、ウォッピングなどの街を見たことがあるが、詰め込みといい不潔さといい、人が住むにはまったくふさわしくない、この地域の小屋ほどひどいのは見たことがない」という叙述から始まる、次のような貧民の小屋に立ち入った報告もある。

小屋一は、二二平方フィートの天井が低い一室のみ。不潔なぼろの寝台に横たわっている、すすけて黒くなっている老人が一人いた。同小屋には憔悴した息子が一人同居。小屋二は汚くきわめて小さな部屋が一つあるが、耐え難いような狭さ。床は土と石。中央では白痴が椅子にすわっていた。七〇か八〇歳の彼女の母が傍らの寝台に横たわり、病気で骨と皮になっていた。部屋には家具とよべる物は何も無い。小屋三には男とその二〇歳ほどの白痴の息子二人がいた。小屋四は部屋が一つで、父と母、その娘と夫がいて、部屋が狭いので近接しておかれた寝台を占拠していた。寝台は汚く、家具は悲惨で、風通しも悪かった。小屋五は、一部屋の小屋で、成人の姉妹、成人の兄弟四人がいた。四人が同じ寝台を使っていた。少し大きめになっていたが、同じ寝台を使っていた。屋根は低く、通気も悪かった。<sup>(57)</sup>これらの家に近くにはどこにも便所が見あたらなかったし、村全体でも見かけなかった。

不潔、狭さ、寝台の共有、通気の悪さ、便所の欠如、ここには調査委員たちが彼らの判断の基準とした、ヴィクトリア朝期の中流階級の受容可能な行動規範とは著しく異なるところか、それに反したウェールズ人の特徴が集約的に記述さ

れている。ただし、これらはまったく未見ではなく、ロンドンで見ていた貧民街を手持ちのコンセプトとして、ウェールズの貧困地域を既視感として記述した。その多くはウェールズ人の特質というよりも労働者階級の貧困と関連するものであった。しかし、これらはいかにもウェールズ特有の状況であるかのように書かれると、労働者像というより、イングランドと比較すると劣等というしかないウェールズ人像の構築に使われてしまうのである。

リングンは現地の言葉ができないために、衣服と外見から日曜学校の生徒（成人）の属する階級を判断した。階級は経済状態をそのまま反映する時代であったし、見知らぬ人の階級を外見から知り得るのは容易だったが、これは自信満々に行われ、しかもウェールズの労働者階級の微細な相違（農業労働者と採掘工などの相違）までかき分けて、判断が下されており、この才能を持つ特別な人物であるかのように誇示した<sup>(58)</sup>。

これも言葉ができない分、嗅覚が鋭くなったか、あるいは生来嗅覚が鋭かったかは不明であるが、リングンは「において」に対しても敏感であった。ウェールズの不潔、汚物、赤貧をにおいて感知した。便所においても気になった。便所は道徳性と直結し、便所のない学校、男女区別なしの便所には危惧の表明がなされた。リングンをはじめ調査委員にとって、清潔さと道徳性は緊密に連携していたし、清潔さは道徳性の目に見えるサインと見なされた。裏返せば、不潔さは道徳の墮落であった<sup>(59)</sup>。ケイ・シャトルワースの植民地学校の設立目的にも「有色人種」に「清潔さ」を教えることが重要視されていた。ウェールズ教育調査委員たちもこれを引き継いでいたかのように「清潔さ」に触れた。

## おわりに

第1節で明らかなように、イングランドとウェールズは、光明と暗黒、文明と野蛮、高位と低位、と対比的なイメージで論じられ、言語問題でも、ウェールズ語の道徳的な墮落、時代遅れ、不完全な文明、特殊な雰囲気、英語との間にある真鍮の壁と水門のイメージで論じられた。ここで見られるのは、王国のよき市民になるのに必要とされるブリテン性か

らウェールズ人を切斷してしまう圧倒的な両者の格差、対照性、切斷のイメージである。

そして、これらの両者の対比や格差認識の前提の一つになっているのが、言語とそれを話す人々、共同体の「進化」の関係であった。英語はそれを話す人々の高度な「進化」とともに語られ、ウェールズ語はそれを話す人々の低位な文化や道徳とともに語られた。

ウェールズ語と結合すると想定されたウェールズ人の性質をめぐるネガティブイメージは、これ以外の問題にも見られた。第2節で見られたように、「高貴なる野蛮人」「動物との類似性」「ホッテントット」「中国」「不潔と清潔」などウェールズは植民地や帝国とたえず比較されたり、これらが比喩として持ち出された。ウェールズ人を「怠慢」「詐欺」と描写したのは、植民地の黒人奴隷や原住民の性格描写に酷似している。ウェールズと植民地や帝国をめぐる言説は驚くほど類似していた。この点で、この調査自体、一種の「植民地状況」のもとでの人類的なフィールドワーク調査とも言えるとし、インドとウェールズを並べて論じたクープランド、ヘクターの指摘は正鵠を射ていた。<sup>(60)</sup> また、調査委員のウェールズ調査の仕事は、植民地の「フィールドワーク」に出かける「人類学者」の仕事に似ていたとし、リンゲンを、フィールドワークから帰ってきた直後に、発見した「部族」について、得たばかりのそれも末梢的な知識を並べ立てようと腐心する人類学者のようなどころがあったとのロバーツの指摘も当たっている。<sup>(61)</sup>

## 註

- (1) *Reports of the Commissioners on the State of Education in Wales, with Appendix* (Part II, 1847; Shannon: Irish University Press, 1969; *Reports of the Commissioners on the State of Education in Wales, with Appendices* (Part II and Part III, 1847; Shannon: Irish University Press, 1969. 本報告書は、地域ごとに三部に分かれ、第一部が一冊に収容され、第二部と第三部がもう一冊に収容され、合計二冊となっている。以下、本報告書からのPartと引用頁は、たとえば「123-24」と表記し、「I = Part 23-24 = 頁数を示す。Appendix部分からの引用はApp.と示す。

- (2) 「帝国のような地域——ウェールズにおける英語帝国主義」伊藤定良・平田雅博編著『近代ヨーロッパを読み解く——帝国・国民国家・地域』第一章、ミネルヴァ書房、二〇〇八年。『ウェールズ・隣人にして異国——1847年報告書に至る道』『松山大学論集』第二卷、第四号、二〇一〇年。『英語が必修だった小学生——イングランドの隣人ウェールズ』『ヨーロッパ・グローバルゼーションと諸文化圏の変容』研究プロジェクト報告書』三、東北学院大学オープン・リサーチ・センター、二〇一〇年。
- (3) Gwyneth Tyson Roberts, *The Language of Blue Books: The Perfect Instrument of Empire*, Cardiff: University of Wales Press, 1998, pp.186-191.  
 II.64.  
 III.8,59,67.
- (4) Gareth Elwyn Jones, 'The Welsh Language in the Blue Books of 1847', in Geraint H.Jenkins ed., *The Welsh Language and its Social Dominus 1801-1911*, Cardiff: University of Wales Press, 2000, p.452.  
 I.2-3.  
 I.iv.  
 II.34.  
 III.25.  
 III.App.100.  
 I.7.  
 III.8.  
 II.25.  
 III.61-62.  
 III.59.  
 III.63.  
 Jones, pp.442-443.  
 III.17-20,22.  
 III.38.  
 I.6-7.  
 I.7.  
 II.33.
- (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23)

- (29)(28)(27)(26)(25)(24)  
 II.66.  
 II.App.90.  
 Roberts, p.203.  
 III.66-68.  
 I.216.助手モリス。  
 A・H・ドット『ウェールズの歴史——先史時代から現在までのウェールズの生活と文化』吉賀憲夫訳、京都修学社、二〇〇〇年、  
 一三八頁。  
 II.147.  
 I.5.Rev.David Rees of Llanelly の証言。  
 III.8.59.67.  
 電子辞書『リーダーズプラス』研究社。  
 Welsh Academy, *Encyclopedia of Wales*, University of Wales Press, 2008,p.97.  
 I.254.  
 II.56-57.  
 II.21.57.  
 I.21.  
 III.67.  
 III.67-68.  
 III.67.  
 I.223.  
 II.3-6.  
 Roberts, p.96.  
 Roberts, pp.164-165.  
 II,pp.56-57.  
 II.62.Roberts, pp.182-183.  
 II.275.  
 I.6.Roberts, pp.183-184.
- (49)(48)(47)(46)(45)(44)(43)(42)(41)(40)(39)(38)(37)(36)(35)(34)(33)(32)(31)(30)

- (50) II.58.  
 Roberts, p.133.  
 (51) 以下の「用」順に「用」の順に。 III.App.52,III.App.133, II.162,II.45,281,239, I. 272, 393, I.237.  
 (52) II.135-136.  
 (53) I.367.  
 (54) *Oxford English Dictionary*, 2nd ed. on CD,1996;Roberts, p.147.n.  
 (55) I.304.  
 (56) III.75.  
 (57) I.349;Roberts, p.140.  
 (58) III.464-5,III.App.30-31;Roberts, pp.142-144.  
 (59) Michael Hechter, *Internal Colonialism : The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966*, Berkeley : University of California Press, 1975,p.75.  
 (60) Roberts, pp.78,88,99,134,181.  
 (61)